



さてまた一仕事をして日本に向かっている。ダッカで冒険の勉強会や会議を終わり、深夜2時の出発前に合わせてタクシーをとばしていた。そのタクシーが心もたなく、街から出るのに川辺の袋小路に入ってうろろしているという情なさ。それでもようやくまっすぐ空港へ向かう道に入って快調に走り始めたら、パタッと止まってしまった。こんな夜中にどうしたのかと思しながら大分たってから列車がゆくりと左から追いついてゆき、ああ、踏切かかと納得する。納得するがそれにしてもまだ動かない。一日に数本しかない列車でこんなに止まるはずがないと思いつつようやく踏切に至ってわかった。

踏切では暗闇の中に大勢の人間の熱気があふれ、黒い筋肉が束になってレールを引き剥がしていた。レール交換なんぞと言うスマートなものではなく、声を合わせ力に任せてレールをねじ曲しながら、引きむしっていくと言う力あふれるもので、その群衆のたくましさは古代の叙事詩を見るような感覚すら覚えた。インド国境から徐々に進んできた狭いレール幅を広いものにしていく工事の最先端がようやくダッカに入ろうとしているとはわかっていても、その群衆からあふれる生き物の生の熱気の余韻で空港へ向かう。空港へ着くとまだ出発時間以上前だがすでにチェックインが始まっていた。まあよくあることだ。早く出国手続きをして酒を飲もうと、喜んでチェックイン。すぐにいつもの店へ走ってビールを探すが、ない。聞いてもない。だってこの間まであったんじゃないかと言ってもないものはない。空港の隅々まで探したが、ない。半ば怒りがこみ上げてきたが仕方がない。やむなく一番安いウイスキーの中瓶を探して飲む。実こうまかった。水割りの水も買ったが、いまいましい酒なのでもったいなくて割らずに飲む。「これが本物のウイスキーだよなー。」「いつもの8ドルのやつとは違ふよなー。」と言いつつ飲む。乗る前に全席隣んじやおうと思ったが、目の端に登壇のチケットでペットボトルを持っている人が入っていたので、少し残して香港の空港で飲むことにする。そして搭乗酒を持って入れたが、別件で友人が、いちゃもんをつけられて、ワイロの金をじっくり値切ってから飛び立つ。

さて、香港 8時間前 成田へ行く飛行機は夕方だ。どうすりゃあいいんだ。とりあえず出国するかしないか決める前に、疲れ果てているのでベンチで一眠り。案内所のおねえちゃんに香港島への行き方など教わっておく。一眠りの後「まあ、一応出国してみるか。」と金がないとどうにもならんから、まあ、冒険だ。だからUSドルで40ドルも換えておくかと換金すると280香港ドル程度になった。そこで二人ははっと思った。「確か、市内までの電車代100ドルって聞いてなかったけ?」「そうだった。でもそしたら行って帰って200ドル使ったら飯もあぶないよな。」でもまあ、各駅で言うのがあってもっと安いかもしれないと一応ホームまで行ってみた。素晴らしい新電車が音も無く走っていたが、それしかないと言ったことがわかった。「見に行くか、飯を食うか、どっちにする?」という語は「もちろん飯だ。」と言ったことになり、結局一日空港大難民となって、じっくり歩き回り、おもちゃ屋ではラジコンヘリコプターで遊び、安くするから買って行ってというおねえちゃんに「そんな金は無いのだ。」とお断り、見つけたベトナム料理屋でゆくり食事をとった。土産でも買おうと思ったがとても手持ちの金で買えるものは無く、見るだけにして、夕方、沢山の中国の人たちの中のベンチで残っていたウイスキーをちびちびとやって時間を待つ。そんな私達をじっと見つめていた中国の壮年の男は実にしきりした目をしていて、これまでの生きてきた道程はどんなだったかと突然と考えていたら、その連れの大きめのちょっと派手めのおかあちゃんと、いまどきの娘が現れ、娘もいかに甘やかされっぱなしでだらだらと育ったと全身に書いてあるぐーたらさ。日本のぐーたらのおじさんたちは「やっぱ」、一人っ子政策の弊害だね。」「俺が親ならシバイでやりたいね。」「親もかわいそーだよなー。」などとつぶやきながらも、「おれたちってやっぱピンボーだったんだねー。」「そりゃあ折紙付だよなー。」とまたちびりとやってやがて成田発の便に乗る。疲れ果てて真夜中に東京に帰つたという。そんな日もありました。